つわものどもが夢の跡

佐伯航空隊兵舎の保存を望む

桧垣七郎

（会員・佐伯市下久部岡の谷）

佐伯海軍航空隊が開設されたのは、昭和九年、私が小学校に入学する前の年であったと思う。

初代司令は別府中佐で、やや背の低い小肥りの、如何にも闘将をしのばせる風貌の人で、鹿児島県の出身ではなかったろうかと思っている。佐伯の人達は、軍都としての町の発展を喜び、子供達も「輝く佐伯こうくうたーい」と歌うように、口々に唱えながら遊んだものである。

市内上久部出身のタイやんこと伊東太市さんは、当時の飛行機乗りで、子供達の間でのヒーローであった。飛行機（当時はまだ主翼が上下二段になった複葉機であった）が飛べば、子供達は展望のきく広い所に走って出て

「タイやん飛行　旗落とせー」

と、皆で口を揃えて、声をかぎりに叫びながら空を仰いで足踏みして、踊りながら両手を振った。

そのタイやんが上堅田小学校の運動会の日に、愛機を駆って運動場上空に現われ、低空で旋回しながら「母校の運動会を祝す」という通信筒を投下したことは、子供達の間でもっぱらの話題となり、まだ入学していなかった私は兄からその時の様子を聞き、それを見ることのできなかったことをどれだけ残念に思ったかしれなかった。

それから数年後の昭和十一年十二月、タイやんは鹿屋航空隊で、夜間飛行訓練中悲しくも殉職された。彼は今篠崎公園にある軍人墓地で永の眠りについている。

故海軍航空兵曹長勲七等　伊東太市之墓

佐伯の空では天気さえよければ、何時も数機の飛行機が戦技訓練をするのが望見された。名パイロットと謳われた玉井大尉の操縦する九〇戦が、城山上空で銀翼を輝かせながら横転・逆転・宙返り・キリもみ・木の葉落としなどの妙技を展開するのを、子供ながら息を呑む思いで飽かずに眺めた。

その飛行機も、年を追って新鋭機にとって替わられ、複葉機の九〇戦・九五戦から、やがて画期的ともいえる低翼単葉、見るからに軽快俊敏な感じの九六戦に替わって行く。キーンというカン高い金属音を響かせて、流麗

な機体を輝かせながら縦横に大空をかけめぐり、宙返り急旋回などする九六戦は子供達のあこがれの的であり、よく図画の時間にはその画を描いた。

太平洋戦争が始まる前後まで、海軍記念日の五月二十七日には、航空隊を一般市民に開放して、飛行機の見物などさせるのが恒例の行事であった。

昭和十二年頃の海軍記念日の時、若い士官の操縦する九六戦が航空隊上空で超低空の宙返りをして水平飛行に戻る時、高度が下がり過ぎて防波堤に激突し、見物の群衆の目前で惨死するという痛ましい事故もあった。

やがて、世界の風雲急を告げ、太平洋戦争に突入する頃には名機零戦も姿を見せ始め、佐伯の上空では連日追いつ追われつの空戦訓練が行われるようになった。

そんなある日、二機の零戦が空中接触して一機が下堅田の市谷に墜落するという事故が起きた。幸い搭乗員はパラシュートで脱出して無事だった。墜落する機から飛び出した搭乗員のパラシュートが開くと、僚機はそのまわりを旋回しながら無事着地するのを見届けて航空隊に帰り、直ちに飛行服のまま搭乗員たちが軍用トラックの荷台に乗って現場に急行するのが見られた。

佐伯航空隊には、日本海軍の艦上機の搭乗員のほとんどが一度は勤務したのではなかろうか。古くは人格技倆ともに名パイロットの名の高かった間瀬兵曹長をはじめ第二次大戦中の有名な撃墜王の坂井三郎中尉もその著『大空のサムライ』の中に佐伯航空隊時代の思い出を書いている。

いま、篠崎公園の土手に立って佐伯の空を見上げれば九〇戦・九五戦・九六戦・零戦、それに九七艦攻・九九艦爆等々が爆音を轟かせて大空狭しとばかり天翔ける、遠く過ぎ去った日の幻が目に浮かぶ。

支那事変から太平洋戦争へと戦雲流れる中で、若い搭乗員達が愛機に命を託し、技倆の錬磨に青春のすべてを賭けて日夜猛訓練に励んだ日々。彼等の心中にはどんな思いが去来し、あの兵舎の中で如何なる夢を結んだのであろうか。外出を許されて三々五々連れ立って歩く下士官兵の口から

「戦争にも行ってきた。相手を殺さねばこちらが殺される。殺し合いは決してよいものではない」

という言葉を聞いたことがある。戦争のない平和な生活を願う兵士達の心情を象徴する言葉ではないだろうか。

あれから茫々半世紀に近い月日が流れ、彼等のことも忘却の彼方に消え去ろうとしている。

大きな歴史のうねりに巻き込まれて、あるいは苛烈な戦いの中に散り、あるいは辛くも生き残った彼等の夢の跡を偲び、私達が再びあのような暗い時代を繰り返さないよう平和への心の礎を築くために、軍隊の持つ非常なきびしさを象徴するように厳然と立つ兵舎を「当時のままの姿」で保存し、戦争への戒めのよすがとしたいと願う。

また、その兵舎の周囲には現在海上自衛隊が使用している元庁舎、それに気缶場、床屋などの建物、爆弾や燃料を収納したと思われる山腹のトンネル、飛行機を隠した掩体壕など、当時の遺構が数多く遺っている。兵舎の中を平和資料館とし、その他の遺構も復元して貴重な歴史的遺産として、戦争の悲惨さ、むなしさを後世に語り継ぐべく遺すことも意義あることではなかろうか。会員諸賢のご意見を承ることができれば幸いである。

夏草やつわものどもが夢の跡

荒れるにまかせた兵舎の前に立つと、芭蕉の名句のあわれがひとしお身にしむ。